

# 平成 21 年度 産業技術連携推進会議 デザイン分科会

## < 議事録 >

日 時：平成 21 年 7 月 2 日(木)～7 月 3 日(金)

場 所：一日目 愛知県名古屋市中区丸の内 2 丁目 5-10(アイリス愛知：コスモス及びサフラン)

二日目 愛知県名古屋市中区栄三丁目 18 番 1 号(ナディアパーク・デザインセンタービル 6F：プレゼンテーションルーム)

主 催：産業技術連携推進会議 ライフサイエンス部会 デザイン分科会

協 力：株式会社 国際デザインセンター

### ■デザイン分科会 本会議

#### 1. 開 会

#### 2. 挨拶

・デザイン分科会長 北海道立工業試験場 製品技術部デザイン開発課長 及川 雅稔

・ライフサイエンス部会副部会長 (独)産業技術総合研究所 産学官連携推進部門

企業・大学連携室 総括主幹 橋本 亮一

挨拶と共に、ライフサイエンス部会 平成 21 年度活動方針及び経産省、産総研による公設研、中小企業支援制度の紹介。

・開催県代表 愛知県産業労働部 技監 岩田 勇二

#### 3. 議長選出

・愛知県産業技術研究所 所長 都築 正廣

#### 4. 議 事

##### 1) 連絡事項

・中部経済産業局 サービス産業室 コンテンツ産業支援室 室長補佐 浅井 敬介

本日は、経済産業省 デザイン室の方から、説明をさせて頂く予定だったが、現在の景気状況への緊急経済対策である補正予算の都合上参加できなくなった。そこで、代わりに私が説明させて頂く。この資料は、世界の動きと、それに伴う日本のデザイン政策がどのようになってきたのかを示したものである。このあたりは、皆様方の方がよくご存じかと思うので、詳しくは説明しない。

1990 年位までは欧米マーケットということで、大量生産・大量消費のなかで海外の真似をして、日本製品は改良を重ねてきた。そのあたりに諸外国からの批判もあり、オリジナルデザインの育成を進めてきた。その一環で、グッドデザインというしくみを作り、日本のデザイン振興は、チェック機能も含めて発展してきた。

その次の 1990 年から昨年位までには、新たに新興国のマーケットが育ってきた。ユニバーサルデザイン・人間工学の概念も採り入れられ、マーケットインというところに

入ってきた。この頃にキッズデザインの内容も推進されてきた。

さらに、これからは発展途上国のマーケットというものが加わってくる。今の景気の状態もあって、貧困層が世界的に増えている。この部分を、デザインで解決していこうという動きが出てきている。併せて安全・安心も解決していくことが考えられている。

日本としては、人が資本ということで、クリエイティブ産業を基盤強化するという流れになっている。昨年、感性価値創造イニシアチブというものを立ち上げ、3年間で感性価値創造イヤーに取り組んでいる。2008年はパリと東京で実施した。今年、つい先日ニューヨークで実施した。その後、今年度は神戸で開催する予定である。来年度は、中国の上海博を狙い、その後、金沢での開催を考えている。

キッズデザインということで、昨年度から重点的に取り組んでいるが、これは何かというと、資料中、円の中心に書いてある、安全知識の共有ネットワークを構築する事が目的である。事故にあった子供が、病院に運ばれてどういった状況で、どういった理由で事故が起こったのかを、事細かに収集し、その情報を原因究明し、製品開発に生かす情報のサイクル・システムを作成中である。このような背景のなか、キッズデザイン賞を設け約270件が受賞している。今年度は、今月末から、キッズデザイン博というものを東京で開催する。興味のある方は、足を運んで頂きたい。

グッドデザイン賞であるが、実は中国などは、アジアのグッドデザイン賞のイメージで広く取り組んできているような動きがある。日本は、このグッドデザイン賞を取ったからといって、海外においてどれだけ評価を受けているのかという疑問が残る。そこで、タイとかフィリピン等と組みながら、タイのDEマークで通過したものはグッドデザイン賞の1次審査をフリーパスにするといったような連携をとり始めている。こういう関係は、今後とも進めていこうと考えている。

また、人材研修という形でも、タイ・マレーシアと昨年度・今年度と実施してきているが、今後、フィリピン・ベトナム・カンボジアといった国も含めてデザイン・マネージメントの人材育成をしていこうと考えている。

今回の緊急経済対策の補正予算としてデザイン関係で二つ用意している。まず一つ目が、デザイナーの海外派遣事業というものである。従来、商品の展示会というものを海外でやってきたが、これはどちらかというと、デザイナーを売り込むための制度というものになっている。今回は、中国のアクセサリー見本市、それからフランクフルトのアンビエンテの見本市である。展示会は、通常モノの展示はされているが、その横でデザイナーの作ったモノと一緒に持って行きながら、自分を売り込んでもらおうといったことを支援する制度である。この公募は、7月中旬位から予定されているので、皆様方ぜひとも売り込みたいという方は、ここに出て行って活用して頂きたい。それから、もう一つは、中小企業とデザイナーが組んで補助対象事業の③④に書いてある、製品の改良、それからパッケージ等販売ツールの開発・制作を行う者に対して、2/3の補助をするというものである。今回の助成対象となったモノは、必ず香港インターナショナルステーションナリーフェアに出展して頂く。そして、現地に行ってPR頂くということが必要となっている。今回の対象となるモノは、「安全・安心」に配慮したモノでなければならない。これは、中国において、日本製品に対する「安全・安心」というものに注目が高いということで、今回このような点を中心に募集する。対象分野についてもほぼ、何

でもいけるような形をとっている。生活関連の家電や様々な商品等を含め対象となっている。皆様方のこれまでの中小企業とのお付き合いの中で対象となるモノがあれば、是非ともご活用頂きたい。これは、ちょうど明日から公募が始まることになっていて、経済産業省のホームページに公募要領があるので、是非ともご覧頂きまして、企業と共にご活用頂きたい。

・(社)人間生活工学研究センター 事務局長 畠中 順子

私どもセンターは、このデザイン分科会に10年近く参加し、「人と暮らし」という視点からデザインの技術や情報の提供をさせて頂いている。今までに「安全・安心」というキーワードがたびたび出てきているが、人間生活工学も目指すところは、そういったところなので、今後も一緒に連携させて頂く機会が有れば非常にありがたい。資料を配付しているが、「日本人の人体寸法データベース」に関連した様々な書籍をまた新たに発刊している。特に今回は、アパレル設計のためのデータ集というものも作っている。デザイナーの方や皆さんの研究所の中での特に衣服分野の方などにご紹介して、またご利用頂きたい。それから、人材育成のための講座なども開催している。地域の企業の方にもご紹介頂き、この分野の知識の習得などにご利用頂きたい。最後は、機関誌「人間生活工学」である。皆さんに購読頂き、投稿して頂いていた「人間生活工学」であるが、一年休刊していたが、復刊したので、積極的な投稿を待っている。また、購読についても宜しくお願ひしたい。「人間生活工学」に関連するユニバーサルデザインの取り組みとか企業の方と一緒に製品を開発されたような事例など、実際に査読する論文もあるが、最新技術として、技法のイメージを提供して頂くようなコントリビューションもあるので、お気軽に投稿頂きたい。

2) デザイン分科会運営要領・細則(案)について

・デザイン分科会長 及川 雅稔

「デザイン分科会運営要領・細則(案)」について、まず議事事項の経緯について簡単に紹介する。昨年山形で開催された、「春のデザイン分科会」の中で、当時は分散研究会という呼び方をしていたが、この分散研究会の進め方・あり方のルールみたいなものが不明確な部分がある。この際、分散研究会と同時に会全体のあり方の確認も含めて運営の骨格となる要領・細則(案)を整備する必要があるという話があった。是非、次の年の春の分科会で案を提示して、皆さんに諮って策定、OKを貰うというところに漕ぎつきたいという議論があった。これが発端となって、今日の議事に至っているということである。実際にどういったかたちでこの案作りを進めたかということ、実は、過去の物質工学連合部会の時代にデザイン分科会の要領・細則というものが作られていた。これを、たたき台としてライフサイエンス部会傘下になったということの状況をふまえ、微調整をしたものを、私の方でたたき台として用意した。産技連の方で運営規程というものが上位として既に整備されている。ここで謳っている内容と違った内容を謳う訳にはいかなないので、この上位にある産技連の運営規程というものを踏まえつつ、物質工学連合部会の内容を参考にしながら、たたき台を一旦まとめた。その後、この分散研究会の幹事さんや、今日お越し頂いている産技連の橋本さんを含めて何人かの方々にたたき台の案を

見て頂き、たくさんの方の加筆修正のご意見を頂いた。この部分を踏まえて素案というかたちで要領・細則をまとめあげた。その後、皆さんの方に、メーリングリストを通じて6月中旬に示し、6月末までにご意見を頂きたいと、皆さんに一旦お諮りしている。そして皆様方のご意見徴収を踏まえて、今日、案というかたちにしてここに議事としてお示ししている。

実は、細かなチェックが行き届かなくて、誤植が幾つかある。誤植を指摘しながら、この要領・細則の中身を簡単に紹介する。第1条ということで名称の話題があり、目的というところで、第2条に明記してあるが、「産業デザイン分野等」という表現で「等」というものが付いているが、これは実は、先ほど中部経済産業局の方から今後のデザイン政策の話もあったが、産業デザインという従来の枠組みで良いのか？最近、ソーシャル・デザインであるとかサービスであるとか街作り、それからブランドであるとか経営とデザインであるとか従来我々が捉えてきた産業デザイン分野という枠からもっと広い範囲をカバーする、ないしは関わる機会が増えてくるのではないかと、ここに等を付けている。今後皆様が、どうお考えになるのかというのもご意見頂きたいところである。ここに等をつけたが、第3条の活動分野に一二三四五と項目があるが産業デザイン分野と明記しており、ここには等が付いていない。ここに等を反映するのがこぼれていた。第2条に合わせると、この産業デザイン分野の後ろに等を入れなければいけないというのが一つ訂正事項である。二番目も同様である。次に構成員について明記した第4条があるが、ちょっと分かり難い表現となっている。第4条「分科会の構成員は、産業技術連携推進会議議員が属する機関の職員及びライフサイエンス部会会員のうち、会員登録を希望する者」という表現になっている。何を言っているのか分かり難いというご意見もあるかとは思いますが、要は、議員というのがどういう人たちかという、一番多いのが、全国公設試〇〇センターの場所長が議員となっている。それから、自治体の長も議員である。産総研それから経産省の立場の方も議員になっている。だから、そういった方々が属する機関つまりライフサイエンス部会じゃない部会に入っている方でも会員登録をすれば、会員になれるということである。ライフサイエンス以外にも沢山の部会があると思うが、そちらの部会に入っている方でもこの分科会にも入ることができるという意味に受け取って頂ければよい。次に組織について第5条で明記しているが、ここはこれまでと大きく異なる内容となっている。「分科会には、特化した技術分野の研究開発等に関する連携や情報の交流活動を行う**連携交流会**を設置することができる。」というふうに明記している。これは従来、分散研究会とか研究会といわれていた組織のことを指す。なぜ今回、研究会という名称を変更したかということ、実は古くから研究会という名称で活動している、ほぼ分科会と変わらないレベルの組織体がある。これについては、産技連の運営規程の中でかなり細かなルールとか活動の縛りがある研究会という位置づけになっている。デザイン分科会の下にぶら下がる、組織を研究会というふうに謳ってしまうと産技連全体の運営規程の縛りが働いてしまうということになってしまう。従来このデザイン分科会で進めてきた分散研究会というのは、もっと自由度と機動性のある主に春の分科会の中だけで運営しているような組織なので、産技連の研究会ルールに縛られるのは本来の意味からいって違うのではないかとご意見がありました。名称を同じくしないで変えた方が良いということで連携交流会という仮称にした。

他にも様々な名称案がでてきたが、今回幾つかでてきた中から連携交流会という名称を採用した。第6条に「全国を次の6ブロックに分ける。」分け方のルールがここに明記している。これは、これまでと同じである。それから、第7条に役員ということでこれも二つ目に「副会長2名程度」ということで「程度」という言葉を付けている。これは、年に一応2回しか大きな大会のイベントがないが、もし単発で新たなイベントが生じた場合に対応して副会長が3名になることがありうるということで、ここでは2名程度という表現にしている。基本的には分科会を開催する開催機関の中から副会長をだすというというルールで規定している。それから、総会及び研究発表会についてのルールが第8条にでている。総会は、基本的に第6条にでている6ブロックの輪番制ということで今年、愛知県がこの順番に該当している。つまり、三番目の東海・北陸ブロックが該当している。来年は、近畿ブロックの中から春の大会の開催機関が該当するということになっている。それから、秋の研究発表会については、今、原則関東ブロック内ということでこれまで進めているので、このように明記している。それから、議事について採決が必要になった場合、これは公平性を確保するという意味合いで、「同じ機関から複数の方が出席している場合は各機関に一票という運用のしかたで議決をしたい」ということで8条の5番に明記している。役員の選出だが、第9条において、会長は、この春の総会に諮り決定するというルールにしている。それ以外の副会長、各ブロック幹事、複数ある連携交流会の代表にあたる代表幹事については、会長がそれぞれの機関の事情等を配慮して任命するというルールとしている。次に役員の任期だが、第10条にある副会長の任期については、基本的には前回の開催日から自身が開催機関となる会議開催日までの概ね1年間ということで、この期間、分科会の準備等に係る実質期間ということで、この期間を副会長の任期としている。そのほか、「役員のお務」「事務局及び役員会」「その他」であるが、非常に基本的なルールを定めているので特にここで補足説明はしない。附則のところ、2番目の7月3日の総会とあるが、これは2日である。誤植につき訂正を願う。先程触れたが、附則の2に会長が他の役員を任命するに当たっては、所属機関、ブロック、連携交流会などの推薦を十分に考慮するという表現をここに明記している。以上、運営要領についてかいつまんで紹介した。

引き続いて、細則の紹介をする。中身は要領の中で触れられなかった、細かなルールについて明記した内容となっている。「目的」これは省く。「会長の選出」ということで、第2条があるが、ここに誤植がある。選出の順番は、「第2条の」となっているがこれは、「要領第6条」と直して頂きたい。「会長の業務」「副会長の業務」は、ごく基本的なことなので特に細かく中身には触れない。第5条にも誤植がある。「ブロック幹事の選出と業務」とあるが、この「選出」を削除して頂きたい。ブロック幹事の選出は会長が任命すると要領で決まっているから不要である。第5条横に「ブロック幹事は、ブロック内の分科会構成員の協議により選出される。」とあるが、これも削除願う。こういう構成員の意見を踏まえ会長が任命するというように要領で定めているからである。つまり第5条は、2項から始まる。第6条で「連携交流会の構成員と活動」について触れている。第7条の中で「連携交流会幹事の選出と業務」について定めている。この第7条の2項の一番目の項目に誤植がある。「研究会活動」とあるが、ここは「連携交流会活動」に訂正願う。それから、第8条の「連携交流会幹事の任期」について記述した項目があげら

れている。この6条、7条、8条については、この後の分散研究会での討議の中で時間を作って御議論頂きたい。第9条のところもこれも第5条と同じように余計な表現があるので、削除頂きたい。第9条横に、「連携交流会代表幹事の選出」とあるが「選出」の削除を願う。これは会長が連携交流会幹事を任命するからである。第9条の1項に「連携交流会代表幹事は、連携交流会幹事の協議により選出される。」とあるが、これも会長が任命するため、削除願う。以降については、触れない。別表に連携交流会のそれぞれの担当幹事、副幹事を明記した別表があったほうが良いとの提案があったため、ここに第7条関連の別表ということで添付している。副幹事は未確定のため、ここは空欄のままとなっている。同じようにデザイン分科会役員名簿という別表を添付している。ブロック幹事は、現状どうなっているのか把握しきれていない。ご存じの方は、この後教えて頂きたい。未確認、未確定の部分は空欄のかたちをとっている。以上、長くなったがライフサイエンス部会傘下のデザイン分科会としての基本運営ルールとなる要領と細則の案について概要をご紹介させて頂いた。

#### 質疑応答

##### ・福井県工業技術センター 大久保氏

福井県工業技術センターだが、運営要領第6条の四番目だが、近畿ブロックの中に和歌山県と書いてあるが、2年前に近畿ブロックを脱会しているはずだが？

次期の総会の幹事県は福井県だが、本来順番からすれば和歌山県である。和歌山県が脱会したため福井県に回ってきたが、ここに書いてあるとおりであれば、和歌山県という順番になるが、その確認はしてあるのか？

##### ・デザイン分科会長 及川氏

実は、和歌山県になるのか福井県になるのかは分からなかったが、この両県が過去の開催回数から候補に挙がっていた。ブロック幹事が誰になったのか把握できていないので、とりあえず福井県工業技術センターの方にまず問い合わせ、和歌山県に担当者がいなくなった等の情報を聞いた。それで、現実的に担うのは難しいだろうということで、福井県工業技術センターへ春の分科会開催の打診をするなど小稲氏と話す機会があった。しかしながら、和歌山県がブロックから脱会したというのは、今日初めて聞いた。

##### ・福井県工業技術センター 大久保氏

脱会していることは、お伝えしたつもりだが？

##### ・デザイン分科会長 及川氏

もし本当に脱会しているのであれば、ブロックの内訳から外さなければならないことになる。これは、早急に確認する必要がある。

##### ・福井県工業技術センター 大久保氏

ここに書いてある内容は、すべて確認済みではないのか？

##### ・デザイン分科会長 及川氏

ここに書いてある内容は、あくまでも案である。案づくりのなかで全部一つ一つ細かく確認ができていないわけではない。物質工学時代につくってあったブロックを今回そのままベースにしつつ検討している。基本的に全部存在していることを前提として案として提出している。逆に今のご指摘があったような、実はこの機関はもうないとか、内訳には入っていても現実的には担うことはできないという事情があれば、この場でご報告

頂いて、それを織り込んだ最終的な案として採決するということになる。とすれば、和歌山県はこの内訳から外すのが妥当であるとする。

・福井県工業技術センター 大久保氏

次年度開催県が福井県のため、挨拶するというので、今日来ているが、この件については、和歌山県に確認する。もし、脱会してまた入っているようなことがあれば、順番的には和歌山県なのでイレギュラーである。

・デザイン分科会長 及川氏

和歌山の機関長がおそらく議員になっていると思われる。ということは、これまで正式な登録というかたちで、誰が分科会員になっているというかたちはきちっととってこなかったと思われる。だから、自動的に分科会メンバー候補というかたちで皆さんたちにもメーリングリストとかにも登録して貰ったり案内をさせて貰ったりしていた。この機会に、良いタイミングなので改めてデザイン分科会そのものに登録するのもしないのか、メンバーがいなければ登録が不要になる。実はそういう内容をブロック内で確認した上で私にご連絡頂きたかったが、誰がブロック長かも事情を把握していなかった為、とりあえず福井県の方に事前打診をして、現実的には福井県で担うことになるという連絡を頂いていた。

・宮崎県工業技術センター 鳥田氏

ブロックの分け方の理解は、加盟者がいるとか加入者がいるとかではなく、日本の各県の分け方としてとらえている。もしかしたら、秋田は今いないため、参加がなくなっている。そうすると、随分抹消される県が出てくるが、それはいけないと考える。これは、ブロックとして分けてあって、ただ今は和歌山にいなかったから、開催できない。そういったことは、ブロック内で、何年か前、規約ができて新しくなった時、会長が順番性になった時も、会長ができない県もあるだろうからそれはブロック内で調整して頂くとかそういうもっと緩やかな感じだったと思うし、それでいいと考える。やはり今後デザインセッションができる県もあると思う。

・デザイン分科会長 及川氏

今、宮崎県の鳥田氏より、以前のブロック分けをした意図のご紹介があったが、その県にデザイン分科会にかかわる機関があるなしにかかわらず、エリア区分としてこういった表現をとったと受け止めて良いか？存在するしないの内訳という見方はしないということか？

・宮崎県工業技術センター 鳥田氏

あくまでも、第6条についてはそのような捉え方でいい。

・デザイン分科会長 及川氏

そういう捉え方があるのももっともですね。

・議長 都築氏

構成員の規程は第4条だが、会員登録を希望する者、これは改めて規約ができる時に希望する者を確認する作業をするということか？

・デザイン分科会長 及川氏

この規約が正式に通った時点で、これまでほとんどなされてなかった登録希望確認をすることになる。

・東京都立産業技術研究センター：阿保氏

細則 7 ページの別紙は第 7 条関連ではなく第 6 条関連ではないか？

・デザイン分科会長：及川氏

そのとおりである。誤植のため、第 6 条関連に訂正願う。

ここで、産総研の橋本様にお聞きしたい。他の分科会でこれに近いような要領・細則を定めて改めて登録という手続きをきちっと踏んでいる機関が主流なのか、そこまでやっている機関は逆に殆ど無いのか状況を説明願いたい。

・産総研：橋本氏

私は、全部の部会・分科会を完全に把握してはいないが、要領まで作って正式に活動している部会は殆ど無いように聞いている。今回デザイン分科会の要領を作るということで、何か見本になるものがないか探して出てきたものを、及川さんに確かお送りしたと思うので、これだけ正式にしているところはなかなか無いと思う。それから、会員の登録もその時出席した人が何となく会員の様な扱いになっているところが多いと思う。議決等も、そもそも要領がないので、多分正式の議決の様なことは実施されていないと思う。

3) 提案要望事項

「研究会幹事を平成 15 年度から務めさせていただいていますが、デザイン分科会への参加旅費を毎年確保することが困難であり、継続した参加ができません。他県も同様であり、このような状況の中、今後の研究会運営をどうしていくかを含め、今回、分科会運営要綱・細則の見直しを検討することになっていると思います。産総研を含め、産学官連携による研究開発等を推進するため、国策による取り組みが多数なされているとは思いますが、地域中小企業とのパイプ役である地方公設試が連携の要となる本分科会や産技連地域部会の会合への参加すらままならない現状で何ができるのか疑問に感じています。この点に関し皆様の見解をお聞かせいただきたい。」(佐賀県工業技術センターより)

・佐賀県工業技術センター：川口氏

今日お越しの経産局の方だとか産総研の方に、我々地方の公設試がどうゆう状況かを知っておいて頂きたい為に、提案要望事項を挙げさせてもらった。先程からデザイン分科会は歴史があるとされていた、十数年前のことだが、ピーク時は 80 名以上、このデザイン分科会に参加して頂いていた。今日お話を聞くと大体 40 名位ということで、半分程度になった。予算が厳しいということもあるが、以前から参加している私からすると、段々下火になっている感もある。国からデザイン政策等のお話があったが、連携するとか産総研と地域の中小企業を結びつける等、活発にやっていきたいという話をしているが、公設試の人自身がこういう場にあまり参加することができない。今回は全国のデザイン分科会ということであるが、我々であれば、九州の地域部会の中のデザイン担当者の集まりだとか諸々も段々と参加することができなくなっている。そういった中で、国の方からの色々な事業があつたりはするけれども、下支えする身近なところが段々だめになってきている気がする。会えば連携も進むだろうし、顔を知っていれば、メーリン

グリストを活発に交わせるということがある。直接会議に行ったら、どういう効果があるのかが問われがちであるが、経産省でも産総研でも事業を考えると地方の公設試がこういう実情であると頭の片隅に置いて新しい事業に取り組んで頂きたい。

• **中部経産局：浅井氏**

今のご質問の確認だが、産技連のデザイン分科会に集まるためのお金を用意してほしいということなのか？私どもが先程説明した施策というのは、地域の中小企業と地域の公設試がより密接にやってくときの支援というかたちでご説明差し上げている。その辺のニュアンスを間違えるといけないと思い確認したい。

• **佐賀県工業技術センター：川口氏**

旅費を負担してほしいと言っている訳ではない。本当に大事な会議であれば、参加は可能である。参加しやすい会議にしてほしい。

• **宮崎県工業技術センター：鳥田氏**

経済産業局の方、産総研の方が毎年参加するので、これを継続して頂けるとありがたい。やはり国から参加して頂けることが力になる。それから欲を言えば、川口さんが言っているのは、せめて会長と交流会幹事の役員の方の旅費ぐらひは産総研あたりから面倒見て頂けないのか？というのが心の底にあるのではないだろうか。

• **議長：都築氏**

この件は抱き合わせで、先程の細則とこれらの議論の底辺は同じであり、ルール作りの中でもう一度中身の肉付けを今から議論して頂くことになろうかと思う。人がやってくれないので、我々がどう考えるかという作業にはいる事になる。

• **デザイン分科会長：及川氏**

これはもう、お金を出して貰うことを願っても無理なので、後は出せるのは知恵だけだと思う。この後、橋本さんからもお聞きしたいが、どこの分科会も厳しい状況だと思う。その中でも、参加者が減らずにむしろ盛り上がっているような仕掛けをして元気にやっているような分科会があれば、どういう工夫をされているのかお聞かせ願いたい。お金をどうやって取ってくるのか、そしてここに出るにふさわしい大義名分をどうやって作るのか、ここで何か得るものが大きくあって、しかも助成金をうまく確保・活用できれば皆さんも参加し易い状況も作れる可能性もある。そのあたりも上手な分科会の生かし方とか、元気にする仕組みのアイデアとか、この後半の分散討議の中で皆さんも出して頂きたいと思っている。

先程触れたが、他の分科会で同じような共通の悩みがあると思われるが、比較的うまく工夫されていてちょっと参考になりそうなものがあればお聞かせ頂きたい。

• **産総研：橋本氏**

私も全部の分科会を把握していない。私の知っているのはライフサイエンス部会に入っているデザイン分科会とバイオテクノロジー分科会とそして今年から医療福祉技術分科会という名前になっているがこれらだが、正直言ってどこも皆さん旅費の確保にすごく苦労していらっしゃるのと同じ状況だ。それから、活動を盛り上げる為に何かやっているかという「おお！」というようなアイデアは、まだ何処もない。年に一回でも集まって、お互いに情報交換して、各公設研での取り組みを皆で共有していくことをまず大前提に集まっている。後、イベント的にやっているのも私がちょっと聞いたの

は、繊維分科会の下にデザイン研究会というものがあり、そこでは何か織物のデザインの巡回展というのを開催しているというお話を聞いた。会員の方がデザインされたものを3ヶ月ぐらいかけて加盟している公設研で順番に回して行って展示会をやるという試みをしているという話は伺った。実際に見に行ったわけではないので、あまり詳しくは知らないが、とりあえず私が知っているのはそれくらいのところだ。

・デザイン分科会長：及川氏

重ねて伺うが、冒頭の挨拶で触れたが、3年を目安に部会の下部組織の存続の可否の見直しをするというルールが大きくある。このあたりの具体的な動きは、何か今年こういうスケジュールで動くとかの情報はありますか？

・産総研：橋本氏

多分、技術部会の部会長レベルでは、もしかしたら何か話をしているかもしれないが、私までには情報はきていない。ライフサイエンス部会は、分科会に付くということで、比較的シンプルな構成なので、多分問題にならないと私は思っている。部会によっては、ピラミッド状にもものすごく組織が分かれていて、しかも一番下の方になると県の数が10くらいしか入っていないような組織があるとかいうようなところは、運営にも困っているし、場合によってはそういうところを少し合従・連衡するといったような話が、もしかしたらでてくるのかなという印象を受けているが、未だ噂までは聞いていない。

#### 4) 分散討議

ものづくりデザイン研究会、ユニバーサルデザイン研究会、地域デザイン研究会に分かれて分散討議を実施した。

#### 5) 全体会議

◆「ものづくりデザイン研究会」東京都都立産業技術研究センター：阿保氏

ものづくりデザイン研究会は、前回まではデジタルデザイン研究会であった。このデジタルデザイン研究会は、その前身としてCG研究会とかネットワーク研究会といった経緯がある。前回の参加者が大変少なく、この研究会もやっていく内容を詰めたかたちでの、今回がいわば第1回目の研究会ともいえる。事前にデジタルといった研究会の経緯があったが、デジタルに限らずアナログの面も含めての「ものづくり」に関しての情報・意見の交流の場となる研究会としたいということを皆さんに周知した。

研究会の内容としては、まず皆さんの自己紹介と活動・事業報告といったものを参加者の皆様に順次説明して頂いた。その内容を以下に示す。

(1)研究会のあり方として情報だけであればホームページを見れば良いことであるが、このような場で顔を合わせて活発な意見交換をする「交流の場」というのが大事だと思うので、こういった活動を活発にしていきたい。(2)デザイン業務、企業からの依頼の関係だが、こういったデザイン業務について民業圧迫ではないかといった外からの声、若しくは自分自身の内の声について皆さんどう思うか、意見を聞きたい。(3)依頼を伴ったデザイン業務の成果物についての知財権等の取り扱いについて皆さんどうしているのか、意見を聞きたい。(4)今導入している機器がリースで今年度更新なのだが、その辺の対応状況について皆さんの情報を伺いたい。(5)昔は伝統技術が公設試にしか残らないといっ

たいわれ方をしていた時代もあったが、今はそういった時代からまた次の時代、もう公設試にすら人が少なくなって、技術が残らなくなってしまっているという危惧が感じられる。 といった声があった。

皆様のご意見を聞く間に時間が経ち、幹事の進行としてはまずかったなと思っている。一方通行の報告で終わり、そういった意見へのディスカッションや意見交換の場が作れなかったのが私幹事の立場としては、皆様に申し訳なかったと思い反省している。あと、産総研の橋本様からの情報提供として、幾つかお話を伺った。この研究会だけの情報だけでなく、皆様にもっとということもあり、日本生体医工学会、医療系と工業系の方が会員となっている学会の紹介があった。そちらの方では、デザインコンペ等を実施するということで、会員外の募集も多分大丈夫ではないかということなので日本生体医工学会をネットで検索するか、若しくは、後ほど、メーリングリストで情報の提供をしようかとの話があった。去年の時点で一部話があったが、産総研でインクジェットによりプリントしたシートで高伸縮性のものがあるが、その技術や製品サンプルをこういった研究会の場で、色々フリートークしてもらえると面白いのではないかと考えたことを考えていた。しかしながら、そのシートを作っている企業が丁度不況で、今製品化への道が滞っているということで、今回そういったところへは至らなかったが、こういった話題の提供も頂いた。

繰り返しになるが、時間が少なくフリートークというか、ディスカッションの場が足りなくて、全て夜の交流会の方で皆さん個々にやって下さいということになった。皆様には申し訳なかったと思っている。要領・細則の件につきまして、先程全体会議であった産業デザイン分野等というお話、連携交流会という名称、細則6条、7条、8条といったようなことについては特に意見もなく、そのとおりに了承を確認した。幹事若しくは副幹事については、もう少し時間をかけて調整ということでこの場で討議を進めることはできなかった。

以上

・デザイン分科会長：及川氏

聞き逃したが、副幹事の件については方法としては、今回は...

・東京都都立産業技術研究センター：阿保氏

今回は、決めることはできなかったので今後調整させて頂きたい。

◆「ユニバーサルデザイン研究会」佐賀県工業技術センター：川口氏

最初に皆さんの自己紹介をはじめ、現状取り組んでいるユニバーサルデザイン関係の情報を中心にお話をして頂いた。話の中で面白いというか新しいと思ったのは、「サービス産業のイノベーションによる地域産業の活性化」ということで岐阜県の、家具ショップでの購入・行動のログなどをとりながら、いかに売り方・サービスをどう向上させていくかという研究を大変興味深く聞かせて頂いた。HQLの畠中様の方からは、「子供の身体特性データベースを作っているの、是非活用してくださいと、生データも皆さんダウンロードできるのでどうぞ」という紹介があった。各県色々な話をしていただいたが、後半の方で運営要領だとか細則の話をさせて頂いた。連携交流会という名称についてどうかという件については、名前は何でも良いということで了承した。副幹事の件も

毎回出られる人がいないからどうしようかということで無理矢理、奈良県の澤島さんにお願いますということで OK 頂いたが、要領を見直す中で、そもそも論が出てきてしまい、今三つの研究会に分かれているが、ものづくりデザイン研究会・地域デザイン振興研究会・ユニバーサルデザイン研究会の分け方が良く分からない。とにかく分かれてディスカッションできる場があれば良いのではないかといった話があった。運営要領の中には、連携交流会を設置することができるのかという話も出てきたが、設置できるからといって毎回開催する必要もないのではないかという話も出てきた。毎回出席できる人がいない、毎年参加できるが職員が順番で参加するという形になっているので、できれば開催県でタイムリーなその時々セッションとかテーマを決めて頂いて、幾つか候補を出して参加者の人数の多いセッションに絞って開催してはどうかと、研究会という形式での開催よりもその方が良いのではないかと、それが実情にあっているのではないかとという意見もあった。その場合、要領がどの様になるのかは分からないが、研究会は連携交流会ということで設置してもいいが、分かれて討議するのであれば、セッション形式のやり方もあるのではないかとという事である。その方が実際には実情に近く、スムーズな運営ができるという意見が出た。少し細かな事だが、連携交流会の代表幹事を決めると書いてあるが、いらぬのではないかとという意見が大勢であった。何もすることは無いのではないかと？後、第 6 条のブロック割があるが、二番目の広域関東が四角で二つに分かれているが、その意味が分からないため要領として書くのであれば誰でも見て分かるように書いて頂きたい。以前、確か分かれていたのが、四角く囲んであると思うが、もう少し標準的にとか一般的に表現した方が良いのではないかと？どの様な形でブロックを分けているのか？将来道州制が導入されるのかどうか分からないが、そういうことを睨んで考えてみたら面白いのではないかと？という話も出た。要領以外に、私の方から提案した旅費が少ないといった話があったが、それを解決する何か良いアイデアなり無いか？というところで、いくつか案が出た。一つは外部資金を獲得するというのがあるが、でも外部資金を取った時だけ直接デザイン分科会に出るということはなかなかできないので、メインは調査というのがあって、そのついでにデザイン分科会に出席するという方法を取っているというところもあった。間接経費というものは外部資金で取れるようになっているのでその中から出して貰うという方法もあるという話もあった。それから、秋は、デザイン分科会の発表の場だが、できたら春の方も発表を入れ込んでもらおうと、出やすいというところもあった。発表するのなら行って良いといわれる。それから、明日専門の講師の方の話を伺うことになっているが、できたら両日、一日目、二日目両方入発表会を入れてもらえると出やすいというところもあった。二日目は現地視察のプログラムが多いが、二日目が現地視察だけになると、一日目で帰ってこいといわれやすい。二日目は、遊びじゃないかといわれて、一日目で日帰りしてこいといわれるところもあると聞いている。それから、お金の工面の方では工芸財団さんのほうで以前はデザイン分科会の方にもお金を拠出して頂いていた時期もあった。今回デザイン分科会の中で、講師の方への謝金とか開催事務局さんの方が、予算だてされているのか、他から出されるのか良く分からないが、あるいはライフサイエンス部会の方から貰えるとかということもあるかもしれないが、そういう、お金が貰えるのであれば、活用してはどうかという話はでていた。

・議長：都築氏

多くの問題提議がでた。復唱すると、総則の方で、もっと充実した適時提案をだしてのセッションとか、幹事は無しで良いのではないか。ブロック分けの説明をお願いしたい。旅費の外部資金の獲得方法・スポンサー探し等、色んな手法があるはずだから、検討したらどうか？大きく三つがでたと思うが、このまま終わると、次の年度に引き継ぎは無しというということになるので、若干でも方向性を出し、引き継ぎをしないと、せっかくのご意見が無になるので、及川さんに説明のところと、どうするかというところまで、まとめて頂きたい。

まず、関東ブロックの2ブロックの意味をお願いしたい。

・東京都都立産業技術研究センター：阿保氏

私もそれほど正確に覚えているわけではないが、先程分散研究会の前に和歌山県の件があったように、日本を分けたときに、この広域関東と書かれているなかで、実際にメンバーがいないのは、茨城、栃木、群馬、新潟とかで、関東甲信越というかたちで統合する場合に、静岡県が実は入っていないので、静岡県を含めた関東甲信越というのは、最近、広域関東と一般的にいうそう。だから、特別な意味があるとか、意図があるというものではない。ただそれだけの区分けになる。

・議長：都築氏

四角く囲ってあるのは何か？

・東京都都立産業技術研究センター：阿保氏

山梨、長野、静岡が三県でブロックを組んでいくのは大変なので、関東と一緒にしてくれといったようなことがあったようなことを覚えている。実際に案がとれた時には、この四角ってなくてもいいと思っている。

・議長：都築氏

分科会長、このマスは取るということで良いか？

・デザイン分科会長：及川氏

それで、結構かと思う。

・議長：都築氏

それでは、この件については、ここで話があったということでお願いします。それから、細則の方だが、適時のテーマ出しのセッションの随時参加というようなご意見があったが、分科会長はどの様に考えるか？規約を変えなければならない事になる。

・デザイン分科会長：及川氏

もう少し、詳しく提案の中身をお聞きしたい？断片的な意見がでたというレベルか？

・「ユニバーサルデザイン研究会」佐賀県工業技術センター：川口氏

私自身も思っていたが、研究会の中から何名もそういう意見がでたので報告した。幹事を決めるときも、とにかく研究会に同じメンバーが出ることが殆ど無いといった中で、今回規約を決めて上手くいくのか？だいたい今、研究会が三つに分かれているが、それ自身も分かれているようで、分かれていない。話している中身を聞くと、どこも似たようなテーマで話している。研究会の名前に絞り込んで話しているかということ、そう

でもない。それだったら、その時々テーマを決めて、参加したい人がやっていけばいいのではないかと？研究幹事、まあ極端に言えば研究会幹事を置かなくても良い？ということになる。実際決めようと思っても一度幹事になった人を交代して貰おうとなっても変わって貰うことができない。毎回来られるところしか幹事になれないということ。副幹事の方も副幹事になると一応、研究会に行くしかない。そのように、役が決まってしまうと、今度は違うところに行きたいと思っても行けない。それだったら、毎回テーマを変えて適宜やっていく方が良いのではないかと？という意見が3人程からでた。皆さんそれに賛同されていた。

・デザイン分科会長：及川氏

分かれて、みんなで協議するという事については、誰も異論はないと受け止めて良いか？

・「ユニバーサルデザイン研究会」佐賀県工業技術センター：川口氏

そういうことだ。

・デザイン分科会長：及川氏

ただ、春の総会に限り、その後引きずらない。引きずっても良いが、必ず継続させるとかの縛りを設けなくて、一回個別に独立したものとして、完結させようというようなセッションを一つでも良いし、複数でも良いし設けて、興味を持ったセッションの中で討議や意見交換を行うというような提案の中身か？

・「ユニバーサルデザイン研究会」佐賀県工業技術センター：川口氏

そうだ。

・デザイン分科会長：及川氏

そういうセッションを連携交流会と呼ぶ事は、構わないか？

・「ユニバーサルデザイン研究会」佐賀県工業技術センター：川口氏

そうだ。

・デザイン分科会長：及川氏

それで、そのセッションを主催したり、テーマを掲げる中核になるという人に関して何か提案があるか？

・「ユニバーサルデザイン研究会」佐賀県工業技術センター：川口氏

基本的には、開催事務局と考える。毎回テーマが変わるとなると、幹事を決めることができないということになる。そうすると開催事務局か分科会長しかいないと思われる。

・デザイン分科会長：及川氏

役員会が色々なことを合議する組織になっている。役員とはブロック幹事と開催県である副会長という形になる。その役員会が毎回、春なら春での個別セッションのテーマの中身を皆さんの意見を踏まえつつ決めて、そこで完結型で設ける。場合によっては、次の年まで引っ張っても良いかもしれない。連続性を必ずしも条件にはしないと云ったニュアンスのご意見ということか？

・「ユニバーサルデザイン研究会」佐賀県工業技術センター：川口氏

そうだ。

・デザイン分科会長：及川氏

今出たような意見が、現実的な運営スタイルとしてとりやすい、その方が得るものが

大きい。ここに参加することで価値ある情報交換にするためには、そういった形式の方が有効である。一方、そういった意見に対して、この案にでていたような従来のやり方を踏襲した方がむしろ良い部分もある。そういった観点で議論して頂きたい。この分かれて行うセッションというのは、特に春の総会の一番の売りというか、ポイントとなる行事である。そこは今後の会のあり方を考えていく上で、どういうスタイルが望ましいかということを考えるのはとても大事な部分である。

あともう一つ、地域デザイン振興研究会の報告もあるので、それを聞いた上で後半に一番大事な議題として、まとめてやって頂ければと考える。

・議長：都築氏

分かった。時間の事もあるので、地域デザイン振興の報告を頂いて、改めて議論したい。

◆「地域デザイン研究会」大分県産業科学技術センター：坂本氏

地域デザイン振興連携交流会の報告をさせて頂く。三テーマで実施した。まず一つ目が、運営細則である。まず、どの様な意見が出たかということ、概ね特に今出されている案で OK だということではあるが、一つ連携交流会という名称が適切でないという意見が出た。そこでは特に具体的な案は出なかったが、先程、宮崎県の鳥田さんから連携検討会とか連携研鑽会が提案された。それから、副幹事に関しては、今回選出ができなかったのが今後検討したい。会員登録の件で、名簿がそれでできたら非常にありがたい。その辺宜しくお願ひしたいと思っている。次二つ目のテーマが、「企業のデザイン能力を高めるにはどうしたら良いのか」といったテーマで、まず大分県のグッドデザイン商品創出支援事業のご紹介をさせて頂いた。それについて質問がなされた。時間的に厳しくて、なかなか討議の方まで入れなかったが、大分県で実施している、年間 3 企業程度のチームを組んで商品開発の川上から川下まで全部商品開発をサポートするという事業をやっている。デザイン能力がないところにデザイン能力を付れたり、あるいは低い能力をお持ちのところは高めていくというような人材育成の方に主眼を置いた事業で、デザインの底上げ、企業の開発能力の底上げをやっていることを紹介した。そういったアプローチもあるということである。三番目のテーマだが、企業のデザイン能力を評価して応援するという事で、デザイン賞・デザインコンペによる地域振興「第 11 回ひろしまグッドデザイン賞」の紹介を広島市産業振興センターの寺戸さんから紹介して頂いた。こちらの面白いところは、大賞よりも下の方の奨励賞の方がメインで、こちらのコンペの主眼だということが、ちょっと面白いと思った。企業にやる気を起こしてもらい、底上げ的な意味のコンペだという説明を受けた。このように色々あがったが、討議の方まで時間がなくてその様な内容で終わった。ちょっと今回中身を色々詰め込みすぎて、もうちょっと時間があつたら良いというところもあった。また来年の課題として検討したい。

以上

・議長：都築氏

私もちょっと覗かせて頂いたが、大変立派な幹事の発表に感激した。規約について連携交流会という名称が適切ではないとの意見だったが、もう一つの要望的な事を聞き漏

らした。

・大分県産業科学技術センター：坂本氏

名簿の件だ

・議長：都築氏

名簿をどうするという事か？

・大分県産業科学技術センター：坂本氏

かつて工芸協会の方で名簿を作って頂いたが、非常に役に立っていた。その工芸協会の方があまり機能していないため、脱退するところもかなり出てきている。それでこちらの方でそういった名簿が、作成されれば非常に役に立つのではないかということである。

・議長：都築氏

それでは、ご質問ご意見を願う。

それでは、残り 30 分もないが、細則に移る。5 ページの第 6 条、これを見ると 6 条の 3 の一、二、三でこの分散会議の位置づけがあるが、明確に区別ができていない表現だと思う。6 条が次の最後の 7 ページとどう関係しているのか？規約だけの読み取りでは、かなり勝手なテーマが出せるという読み取りもできると思う。6 条が 7 ページの別紙を否定しているのか？

・デザイン分科会長：及川氏

新たな交流会が新設されたり改廃した場合、別紙の中身を変えるということです。これを検討していく中で、この別紙を付けなくて良いのではないかといったご意見もあつた。おそらく中身が変更されたり、追記されるページなので、これはあえてここに付けなくても良いと言う意見も検討過程の中であつた。そのような細かな話もあるが、根本的な話として運営要領の第 5 条をどうするかにかかっていると思う。逆に言うと第 5 条以外の運営要領を先にここでご承認頂ければ、5 条を残して概ね皆さんの了解を得たということになる。5 条は、まさに連携交流会を設置することができるということを最初に定義している部分である。幹事と副幹事を置くとか、それから複数の連携交流会が存在する場合は、代表幹事を置くとかここをもっと細かく規程するのが、先程議長の方からご指摘のあつた細則の 6 条 7 条とか 8 条である。この要領の 5 条そのものをもっと弾力的な会として位置づけるために変えようということであれば、そこをここで討議して頂いて、細則はもしかすると今日は間に合わないので要領のみ皆様で承認を受けた所まで進めたい。本日は何とか 5 条の修正案を討議し要領のみ合意を得る。そして、細則については、ちょっと時間を掛けるとすれば、誰が中心となってこの部分を検討するのか、検討体制を今日ここで決めるというところまでで時間切れだと思う。

・議長：都築氏

決議方法は多数決とする。まず、要領の第 5 条をはっきりさせる。ここで提議があつたのは、連携交流会という言葉はどうする、それから、幹事を置く必要があるのか 2 点あつた。まず交流会の名称を再検討した方が良いのか？

・デザイン分科会長：及川氏

連携交流会という傘となる名称をどうするか別として、その下で開催される個別テ

マの会を先程提案されたようなセッション方式で設ける場合、ある大会では一つも設けないこともあり、ある大会では複数設ける場合がある。開催機関と分科会長、その他役員メンバーでふさわしいテーマを事前に見つけることができれば、その場合は、継続性を一応条件にはせず、一回完結型でその大会だけで複数の連携交流会をあるテーマでセッションのような形で開催する。参加者は自由に参加できる。というような捉え方で良ければ、名称は別としてこの5条の表現をそのまま流用することもできると思う。

1項目目は、おそらくできるということなので、できるはしなくても良いという事を含めて、2項、3項をこのまま使えるのか、ぜんぜんこのような制約を設けずに違う、緩い・自由度の高い・弾力的な進め方で規定するか。

今までのルールで概ね良いというような報告のあった二つの分散研究会(ものづくり研究会、地域デザイン研究会)からは、一回完結型のセッションの方が良いという意見は出ていなかったようである。従来型の延長線上一回完結型のようなスタイルに切り替えるかどうか、この点の検討が必要である。

・議長：都築氏

それを想定しながら順番詰めていかなければいけない。いずれもこの要領自体の三つの文章がこれで良いか、これを固定しないと次に行けない。

・東京都都立産業技術研究センター：阿保氏

私の方の研究会幹事としては、継続性を持った会を行う方が望ましいと思う。しかしながら、今現実的に継続して参加できるような人がなかなかいない。したがって、幹事選びも困難な現状である。この会で行うことというのは、やはり継続性を持った形でメンバーが固定化されて、その課題解決なり、何かそういったものについて話し合える様な場になっていくのが望ましいと思う。その理想の部分については、現状のままの方が良いと私は考える。

・議長：都築氏

両極の意見になってきた。まず名称から決定する。研究会が結束し易いといった意見もあるが。変えるか変えないか、変えた方が多い方が多い為、変更する。代案を分会長が次会に提案して貰うということで宜しいか？今ここで決めるか？

・デザイン分科会長：及川氏

今ここで代案を出した方がいい。

・議長：都築氏

意見をお願いします。

・：(不明)

連携グループではどうか？

・議長：都築氏

その他ご意見は？

・宮崎県工業技術センター：鳥田氏

運営要領を皆さんに又メンバーリスト等で送付する時に、事例を挙げて公募すれば良いのでは？この会で決めるということが必要なら決めてほしいが、私は只、交流よりも検証とか検討会の方が良いと思う。研究会とも響きが似ている。

・議長：都築氏

「けんしょう？」 どういう字を書くのか？

・宮崎県工業技術センター：鳥田氏

その様な意見が出ると思っていた。平仮名にしておくとも色々使えるが、やはり自分たちが今までやってきたことを、検証していったということが、この研究会の中身である。色々な提案を検討して証明するというような意味合いである。

・議長：都築氏

いずれにしても公募にするという意見だが、分科会長どう考えるか？

・デザイン分科会長：及川氏

公募して良い案が出てくるのであれば良いが、一度皆様方に照会を掛けている。むしろこういう場の方が案が出ると私は思う。ここで出ないのをもう一回募って出てくるか？出てきたものをどうやって決めるのか？私の一任で良いというと文句が出るかもしれない。ここで、複数候補を立てて、多数決を取って頂く方が私は良いのではないかと思う。

・宮崎県工業技術センター：鳥田氏

メーリングリストで流して頂いたと思うが、元々は研究会だったので、あんまり名前が変わらない様に研究交流会はどうかという案も出させて頂いた。連携交流会はふさわしくない。研究交流会ならまだ良い。

・デザイン分科会長：及川氏

研究交流会という提案。

・議長：都築氏

他にないか？

・福井県工業技術センター 大久保氏

研鑽会が良い。

・デザイン分科会長：及川氏

頭に何か冠言葉を付けるのか？特に付かずに研鑽会か？

・福井県工業技術センター 大久保氏

「何とか研鑽会」。研鑽会だけでもどうかと思う。

・議長：都築氏

他にないか？

・デザイン分科会長：及川氏

元々の連携交流会も候補の一つとして入れてほしい。

・議長：都築氏

分かった。

・デザイン分科会長：及川氏

それと、今出てきた案を候補としてここで採決する事が可能だと思う。

・議長：都築氏

連携交流会は、そもそも何でこのような名称になったのか？

・デザイン分科会長：及川氏

研究交流会とか研究グループ、他にもワーキンググループとか案があった。阿保さん

の方が経緯に詳しい。

・ **東京都都立産業技術研究センター：阿保氏**

最初、交流会という名称だけだったが、それは、ふさわしくないという事で、連携を付した。

・ **議長：都築氏**

乱暴だが、「連携グループ」「検証会」「研究交流会」「研鑽会」「連携交流会」の中から選択する。それでは多数決により「研究交流会」にさせて頂く事になる(拍手)。続いて、幹事を置いても置かなくても良いという件。あった方が良いというのが元々の趣旨と思うが、まず設置した以上は置くという意見が一つ。置くことが出来るというのが二番目。それから、三番目はこの条項削除する事だと思う。

・ **デザイン分科会長：及川氏**

置くことが出来るとしておけば、阿保さんから出たような継続性を保った研究交流会もある。一回きりのセッションという形で完結型の交流会を開く事もできる。この場合は、幹事は置かない。こういった両方をカバーできる可能性は、置くことが出来るとしておくと余地を残すことが文面から可能になるのではないかと思う。その様な捉え方も解釈の一つとして知った上で、今議長が言ったようなところで決議して貰えると良い。

・ **議長：都築氏**

現状のまま「置くことができる」「そんなものは、取る。」「この条文自体をとる。」から選択する。それでは「置くことが出来る」という表現に変えさせて頂く(拍手)。続いて、研究交流会におけるテーマの協議方法についてであるが、前年度テーマ出しを決めておくのか、現行の三つのテーマをずっと固定化していくのかという議論が曖昧な点である。

・ **デザイン分科会長：及川氏**

固定であれば、協議というのも生きてくるが、一回完結型とすると、毎回一年前の春の総会で来年何をやる、こういう完結型の研究交流会を用意する、こういうことを決めなければいけない。

・ **議長：都築氏**

適時やったほうが良い。固定化するより面白いテーマがあったらだしたほうが良いというご意見を頂いた。

・ **宮崎県工業技術センター 鳥田氏**

只、過去の事例を少し知っている人間として、考え方を示したいが、多分この規約が出来ても、その流れが間違わないかという事である。デザイン分科会の会自体の開催については、分科会長と協議しながら開催担当県がその裁量で行う。研究会を拡大研究会として、事前にアンケートも採って、「公設試のデザインの役割」ということで、二日間実施した事がある。そういうことも可能だ。CG が非常に盛んだった 15 年前だとかは、殆どの人が CG に参加した時期がある。4、5 年おきに名称とか内容を皆さんで考えていったと思う。その結果、穏やかに流れてきている。多分、デザインの場合は、臨機応変が得意で、皆さん調和をとるのも得意な事なので、あまり型にはめない方が良いと思う。他の方に参加したい時もあるし、今はメールで幹事の方たちが事前にテーマとかそういったものを流して頂ける。そういう中で選択する事もできるので、あまり固定しない方

が幹事の方もやりやすいと思う。

・議長：都築氏

要は、フレキシビリティを付けると考えた方が良いという事。

・デザイン分科会長：及川氏

例えば具体的に「新設、または改廃は」に続く表現を、何か違う柔軟な表現の提案をして頂ければ良い。

・議長：都築氏

言葉自体が、おかしい。

・デザイン分科会長：及川氏

「総会における協議を経て」なら良いが、「分科会における」という表現がおかしい。

・議長：都築氏

そうだ。

・デザイン分科会長：及川氏

新設と改廃を、どういう柔軟かで弾力的なルールで行うかというところを何らかの形で記述する事が必要になると思う。この部分のフレーズとして適切な表現が良いのだが。

・議長：都築氏

「研究交流会の設置は、総会における協議を経て決定する。」ではどうか？

・東京都都立産業技術研究センター：阿保氏

結局、多くの人数で話し合うのが大変なので三つに分けるという前提がある。今丁度良い人数と思われる。三つの内の一研究会が、名称変更という形で対応してきたので、新設・改廃というのではなく、今までの方法が適切だと思う。

・デザイン分科会長：及川氏

改廃はもしかすると無く、その名称変更で対応が可能かもしれない。只、新設は、場合によっては今後出てくる可能性はある。新たにこういうテーマで関心のある皆さんと一緒に少し継続的に研究交流会を発足させて運営していきたいという希望が出てきた時に、どういう形で了解をするか、誰がそれを承認して、その活動を発足させるかである。

・：(不明)

事情に応じて分科会長が決定するというので如何か？

・ライフサイエンス部会副部長 橋本氏

私も分科会長が決定されるので良いと思う。もしもう少し形式的に決定したいという事であれば、手続きがそれも大変だが、役員会というのが今回できるので、そこで決定する事でも良い。でも、私は、分科会長が采配されるというのが一番早くて良いと思う。

・議長：都築氏

第7条の役員が設置される訳だ。

・デザイン分科会長：及川氏

橋本さんにご提案頂いたのが、丁度良い塩梅かと思われる。実質的にはメール等で役員の方と連絡・情報交換をして、最終的に会長が承認するという事になると思う。

・議長：都築氏

文章としては、「研究交流会の設置は、役員会において決定する。」これ良いか？(拍

手)。要領については、これでコンプリートできた。

・デザイン分科会長：及川氏

確認しておきたいが、第5条の2項の後半に「代表幹事」の話がある。「複数の連携交流会が存在する場合」がでてきたときに「代表幹事」をおくってというフレーズを残すのか？代表幹事が役員構成員になっている。代表幹事までいらないという意見もあった。研究交流会が複数ある場合の、幹事の意見を反映する窓口になる方という事で、代表幹事というものをこの案ではおく形になっている。

・議長：都築氏

例えば今回だと、この御三方の中から誰か代表幹事になるという事か？

・デザイン分科会長：及川氏

そうだ。

・議長：都築氏

旅費が発生するのか？会議が必要か？メールで済むのか？

・デザイン分科会長：及川氏

単純に連絡系統の話になると思う。それは煩雑なので、直接研究会幹事に連絡すれば良い、代表幹事を介してする必要はない。役員メンバーに入れなくても良い。という捉え方もできる。もしくは役員メンバーに連携交流会幹事を全員を入れるという手もある。

・議長：都築氏

ご意見は？

・：(不明)

代表を廃して、幹事運営委員を幹事に入れるのが良いと思う。

・：(不明)

代表幹事の件だが、幹事はその連携交流会の中身のことを企画して様々なことを進行する。従って狭い範囲のことをやるのが幹事だというふうになると思う。そういう幹事が全体のことにかかわる役員会の話に参加してもしょうがないかなという気がする。むしろ全体の大きな事を話しするのは、この一、二、三番目まで、ブロック幹事まで、そして幹事は、その役員会には必要ないと思う。

・議長：都築氏

一案が、代表幹事というものは作らない。研究交流会幹事は役員会に入るのが一案。それから、二番目は代表幹事も置かないし役員会にも入らない。

代表幹事も作らない、役員会にも入らないで決定させて頂く(拍手)。だいぶ骨組みがしっかりしてきた。

・デザイン分科会長：及川氏

代表幹事がらみの表現が何カ所かに出てくる。それを確認して、まず要領全体に OK を頂く決議をお願いしたい。代表幹事を今置かないということになったので、そこを全部削除したものが最終案だ。

・議長：都築氏

それでは確認させて頂く。まず第5条はですね名称の連携交流会を研究交流会という名称に換える。第2項は、一行目は一つ目のセンテンスはおくことができるとして、複

数以降を削除する。三番が研究交流会の設置は、役員会において決定するという文章に変える。第7条四を削除する。第9条の第4項を削除する。第10条の2項のブロック幹事及び代表幹事の任期2年というところの代表幹事を削除する。第11条の第4項を削除する。以上(拍手)。そして、細則については、分科会長にもう少し見て頂く。

・ **デザイン分科会長：及川氏**

細則骨子は、今回の案作りに関わって頂いた方などにまたご意見を聞く形になると思うが、その中で少し細かな部分を先程ご承認頂いた要領と連動性を取る形で、案を詰める。秋の分科会の時に細則修正案という形でご呈示して、短い時間だが、ご意見を頂いて、場合によってはそこで承認を得るといった形が取ればと思う。

・ **議長：都築氏**

それをお願いします。あと若干お金の確保の話があったのと、発表会を入れたらどうかと、翌日の見学会の扱いなど色々あったが、この議論は、時期開催へ引き継ぎで良いか？(拍手)

・ **デザイン分科会長：及川氏**

研究交流会については、今ある三つはそのまま存在しているということを前提に、先程別紙という形で項目を挙げた。幹事は設けても設けなくても良いという、どちらも選択できるので、幹事はもう既にいるので、三つについては、今までどおりの名称に研究交流会を付す事で承認できたと受けとめた。それを前提に細則の方を秋までに少し詰めて皆様に諮りたい。

・ **議長：都築氏**

一応、とりあえずの結論につなげられた。次期開催県の挨拶と次期分科会長の挨拶を願いたい。まず次期開催県は、山梨県工業技術センターで、串田様の方からご挨拶をお願いしたい。

・ **次期開催県 山梨県工業技術センター：串田氏**

こんな高いところに立つとは予想をしてなかったので些か緊張するが、山梨県秋の研究発表会は、ご案内のとおり、山梨県で担当させて頂く。詳細は、未だ決まっていないが、今の予定では、10月の下旬から11月の中旬に開催したいと考えている。本来なら、山梨にぜひ来て頂きたいが、過去二年の例にならって東京の方で開催したいと考えている。近く、詳細を詰めて皆様へご案内差し上げたい。ぜひ多数の方のご参加またご発表の方宜しくをお願いしたい。

・ **議長：都築氏**

次回、多数のご参加をお願いしたい。次に次年度開催県の福井だが、和歌山県との話が付いたということで良いか？それでは、お願いします。

・ **次年度開催県 福井県工業技術センター：小稲氏**

次年度私どもの方で開催させて頂く。多くの課題を頂いている様だが、ご協力の程宜しくをお願いしたい。また、今年度開催県の愛知と新旧分科会長には色々ご指導頂き開催したいと思う。ご協力の程宜しくをお願いしたい。

・ **議長：都築氏**

来年度宜しくをお願いしたい。最後になるが、静岡県の方からご挨拶を頂きたい。

・静岡県工業技術研究所：多々良氏

次期分科会長候補の件ですが、広域関東ブロック幹事の埼玉県の方から連絡があり、今回の春の大会に参加出来ないということで、私の方に依頼があった。広域関東ブロック内で次期分科会長候補を検討して頂きたいということで一週間くらい前に連絡があり、先々日、分科会長の方からも候補を決めて頂きたいとの連絡を受けたが、今回メールでブロック内メンバーに一回流しただけで、未だ具体的に話をして無い。今回参加して頂いている広域関東のブロックの方には是非ご意見を伺って早急に決められればとは思っている。また、関係ブロックの方宜しくお願いしたい。

・議長：都築氏

秋には、はっきりするのか？

・デザイン分科会長：及川氏

今回の春の総会で候補者がでて、ここでご承認受ければ、要領に則った形になるが、今回に限っては、秋の分科会までにブロック内で候補者を一人立てて頂くと、そこで先程の細則とセットでご承認を頂くような形でお諮りするということで如何か？

・議長：都築氏

秋にはっきりするというので、御容赦頂きたい。

大変拙い司会で申し訳なかった。これをもって議題の方終わらせて頂く。ありがとう。

5. 閉 会

## <特別講演会>

### ■デザイン分科会 本会議

1. ①国立大学法人 名古屋工業大学建築・デザイン工学科(つくり領域)教授 木村 徹氏

#### 「自動車デザインの変遷と未来」

ジェネラルモータースがガバメントモータースになってしまったという信じられないことが起こっている。もっと信じられないのは銀行というのは潰れないと思っていのに銀行が潰れるっていうのを聞いた時に『えっ?』と思った。世の中の今までの常識ってのはもう信じられない。僕らは、子供の頃から学んできたことの殆ど半分を疑ってかかって間違いない世の中になってきた。ガバメントモータースはじめ、クライスラーで社長と会長を務めるのは、三年ぐらい前までTMS(トヨタ・モーター・セールス・USA)の社長をやっていたジム・プレスで、僕らと一緒によくデザインの議論したこともある。多分日本の企業だから社長と部長で議論ができたが、多分アメリカではこんな事ありえないと思う。それで世の中変わったら、次に何をしなければいけないのか、皆さんご苦労されていると思う。そういう事を考えるとき、いつも100年戻ろう... 100年戻ると次に何をやらなければならないのか多少は見えてくる。今日は、自動車がどうやって変わってきたかデザインを中心に紹介して、これからのデザインをどうすればいいのか話をさせて頂きたい。20世紀の車のデザインの変遷で、これを人間の成長(誕生してから赤ちゃんになって... それからどんどん成長してく)にあてはめてみるとどうなるかという話をしてみたい。それから今、IT化で騒がれているが、IT化による製品の変化、トヨタが作りたい未来、デザインの方向... こ

のような順にお話ししたい。自動車は成熟産業でもなければ完成された商品でもない。自動車に対する成長度合いのイメージは、成人に成ったばかり一成人曙期ぐらいのイメージではないだろうか。これからその成長過程をおって説明したい。

「誕生」 1886年

「幼児期」 1900年～1930年

→フェンダーは独立

「少年期」 1930年～1950年 知的発達が顕著

→一体化・一般化（機能を追求）

「青年期」 1980年～1990年 自我意識が著しく発達する

→1970年交通事故死者がピークに

後期 1990年～2000年 血気盛んで働き盛り

→多様化・巨大化（快適性を追求）

「成人曙期」 2000年～2010年

→エコ化（持続性を追求）

「誕生」 ドイツでガソリン自動車誕生

ドイツでガソリン自動車誕生＝世界初の自動車は 1769年フランスで生まれたキュニョーと呼ばれる蒸気自動車だと言われている。フランス軍の為の砲車をけん引するために作った。フロントヘビーでハンドルかほとんどきかなかつた。時速9キロガソリン自動車1号車はカールベンツが1886年に始めて自動車（ベンツ、パテント、モートル、ヴァーゲン、3輪車）を設計制作した。現在の様な操舵性能をえる事が出来ず3輪で設計したと言われている。水平単気筒エンジンがリア・アアクスルの上に置かれ、時速は15キロぐらいでデフは備えていた。

「幼児期①」 フランスでFR方式誕生

人間の場合幼児期の特徴的な現象として自己中心性情緒性具体性等によって特徴づけられる。

「幼児期②」 イギリス（欧州）で高級車の思想が形成される

イギリスの馬車組合の力は大変強く自動車は危険なので走るときは赤旗を持った人が前を歩くよう決められていたため自動車の普及は他国に遅れをとった。

「幼児期③」 アメリカで大衆化

T型フォード(1908年)を開発 ベルトコンベア方式による大量生産に成功し一気に大衆化を加速。1908年から1927年までの20年間で、1500万台も生産された。流れ作業による「ベルトコンベアシステム」と長期に渡る生産によって、発売当初850ドルしたT型は、末期の25年には290ドルにまで下がる。このことによって、車はブルジョワの贅沢品から労働者でも購入できる「生活必需品」へと発展していく。

「少年期①」 ボディーの一体化

知的発達が顕著、社会性も次第に発達して集団生活を営みうるようになる時期。構造部材が木から金属に変わる事によりキャビン形状も含め曲面が使えるようになってきた。

「少年期②」 アメ車全盛・新機能探求時代

ボクシーな箱形からスピードへのあこがれからテールフィンとよばれる翼が車に付いた。キャデラック・シリーズ62セダン(1959年)、シボレーインパラ(1959年)、これら以降テールフィンは小さくなる。

「青年期①」 70年代は反省の時代

日本では1970年に事故による死者数が16,765人(ジャンボ33.5台分以上)(2台/月半以上)に達した(警視庁資料)米国では新たに安全基準FMVSS1967年(目に見えるものでは大型衝撃吸収バンパー、シートベルト等)や排気ガス規制1970年(マスキー法)が施行され排ガス対策部品でボンネットはふくれあがった。私がトヨタ自動車に入社したのが1973年ですから、入社してすぐの出来後でこれから先どうなるのか、それだけ覚えている。

### 「青年期②」非日常の追求

青年期は社会のニーズに答えるためさまざまな可能性を追求するジャンルの車が作られた。カリーナED(1985年)、エスティマ(1990年)、RAV4(1994年)、などに代表される、「非日常的なテイスト」を表現しながらも、「日常的な使い易さ」を両立した、クロスオーバーコンセプトとして、数々の新ジャンルを開拓された。

### 「青年期後期」ミディアムクラス受難の年

90年代後半は高級車と安価な車の2極化が起りミディアムサイズのセダンは販売台数が伸び悩み生活者のニーズにフィットしたさまざまなジャンルの車に変わっていった。ユーザーの自動車に対する考え方が明確になり使用目的により整合した車選びとなっていった。そうなる一番使用目的があいまいなセダンが減少するのは当然のことである。もっともポピュラーであったミディアムクラスの販売が低迷し利潤の少ない小さな車と利益は多いが台数の出ない高級車に2分され、賢く選択せざるを得ないユーザーと富裕層が明確に分かれる時代に入ってきた。ハリアー(1997年)

### 「成人曙期」日本の出番(高品質なエコ化で行か)

リーズナブルな価格で壊れにくく高品質な車づくり。又、日本人のきめ細やかな感性で、使い勝手の追求より単なる走る道具に留まらない行き届いたおもてなしの日常生活道具を提供。などで世界中から信頼を勝ち取り、そして今日、エコカー開発で世界に貢献しているそして前世紀の終わりには、従来のエンジン車とは一線を画す「優れた環境性能」と、革新のパッケージによる極めて高い実用性を両立した世界初の量産ハイブリッド乗用車、「プリウス」を1997年、世に登場させた。

### 「これから何が起ころ」エポックメイクな変化

#### 何でも半透明

少し前になるが、大きな技術の変化が訪れる前表面的な代わり映えで市場の活性化を狙った。

#### カメラ テレビ 電話(メール) オーディオ

フィルムを入れるのは難しかった。35ミリ銀塩フィルムはうまく巻き取れず撮影出来なかったことがよくあったがデジカメで全て変わった。かさ張らず軽くて移動も簡単で壁にも掛けられる薄型テレビはうれしい。何時でも何処でも移動が出来簡単に使える携帯電話、I-unit等これらも正しくIT化が産んだUDの代表選手である。

#### トヨタが創りたい未来

#### ひと・社会・地球にやさしい移動空間・移動時間へ

情報通信技術やセンシング技術の一層の発展により、クルマとインフラ、さらには人が情報でつながり、より一体となった総合的なシステムへと進化し、移動空間としてのクルマがシームレスにネットワークに接続し、家やオフィスと同様に高度な情報利用が可能になり、ITSの進化

により、交通事故、交通渋滞、環境負荷をなくすとともに、高齢化社会にも対応し、クルマが夢や感動を世界の人々に与えつづける存在となる。

環境については、プリウスのように低燃費、低排出ガスだけでなく、優れたドライビング性能を実現したクルマをご存知の様に商品化している。

実験室レベルでは考えられていた技術が日米公道テストを実施(2001年)した。FCHV-4の後継モデルが限定販売を開始(2002年：日本で4台、米国で2台)。水素燃料電池自動車とは、水素と酸素の化学反応によって発電した電気エネルギーを使って、モーターを回して走る自動車である。

### デザインの方向

それでは、最近のデザインという言葉について復習して見ると、狭義の意味では従来から使われている「あるコンセプトや想いを具現化するために造形行為とそのディレクションで視覚系(情報系)空間系(環境系)機能系(プロダクト系)」があり、広義の意味では「あるコンセプトや想いを具現化するための計画・設計行為とそのディレクション。戦略のデザイン→個人や社会集団における戦略のデザイン。組織のデザイン→組織構造のデザイン。制度のデザイン→制度、法律、仕組みのデザイン。プロセスのデザイン→業務の流れや工程のデザイン」など最近はその意味も広がっている。

### インダストリアルデザインの理念

昔から使われている狭義の意味にある機能系といわれるデザインのインダストリアルデザインの意味についてももう一度確認すると＝「私たちの生活の質(クオリティ)を高め、産業活動に新しい活力をもたらし、社会全体をより健全な方向へと導いて行こうとするものづくりの行為である(日本産業デザイン振興会)。」

### デザイン・マネージメント

そして、最近ますます重要性を増してきているデザイン・マネージメントは社会の問題解決プロセスにも使われるようになってきた。

「①経営目標を達成するために与えられた②経営資源を最も効果的に③活用し、成果を上げること」

- ①経営目標→人間性の実現・社会性の確保
- ②経営資源→人(ノウハウ)・物(時間・空間)・金・情報・信用(ブランド)
- ③プロセス→P 現状分析・問題発見・目標設定  
・原因追究・対策立案  
→D 進行管理  
→C 成果発表  
→A 修正・歯止め

### トヨタの商品・技術開発の理念

①フィロソフィー

TODAY for TOMORROW

「研究と想像に心をいたし、常に時代に先んずべし」

創業期からのDNA

② ビジョン

## Zeronize & Maximize

ネガティブインパクト、ポジティブインパクト

ネガティブな事（環境負荷や事故）は限りなくゼロに、運転の楽しさ（喜び、感動、快適さ）は可能な限り大きく。

### モビロ・ウイングレット

モビロは中部国際空港「セントレア」で、ウイングレットはすでに次のモデルが完成しているそうである。明日の乗り物のゆくえが楽しみである。

### 終わりに

一番自動車屋が恐れているのは、乗り物なんか電気屋さんでできるということである。カシオが時計造って、セイコーとかシチズンが焦った。カメラも造って、キャノンとかソニーが焦った。あれと同じ事が自動車業界でも起こる可能性は否定できない。最初に話したように銀行はつぶれるし、ジェネラルモーターズがガバメントモーターズになる「今日の常識は明日の非常識」。

## 2. ②株式会社 コボ

代表取締役 山村 真一 氏

### 「不況時代の地域産業における戦略的デザイン活用と公設試の役割」

沢山の方がこの公設試の勉強会に参加されて非常に熱のこもった雰囲気を感じている。私は丁度 35 年前に三菱重工を辞めて、独立して事務所を開いたが、その当時はオイルショックの時期で、すべての材料が無く、デザインをしようと思っても当時の製図用紙という紙が無く、捨てる印刷屋さんのミスプリント紙を貰ってきて、その裏にデザインを描いてお客さんに出すというそんな時代であった。丁度私が三菱に務めていて、アメリカに行っている時は 1 ドル 350 円であった。少し長い目で見ると社会の動きというのはずいぶん変化していると感じる。何故三菱を辞めたかという私は、三菱グループ総合デザインセンター構想を提案していた。たとえば電気、自動車、航空機、船、あるいは銀行、商事、保険会社、旭硝子、ニコン、横浜タイヤと、三菱グループは多くの企業を抱えており、それぞれにデザイナーが専門的な視点で仕事をしていたが、これは非常に効率が悪いと考えた。デザインはグローバルな視点で全体的にモノを視ることが生命線ではないかと思っていたからだ。この構想は決まりかけていたが、社長の交代により「専門家のデザイン部門でいいのではないか」ということで終わりかけた。その時、何も会社ではなくて自分が外に出てデザイン事務所をやれば、全てのことに関わることができるのではないかと、ごく軽い気持ちで退社して事務所を作った。最初は一人で、現在 34 名という結構大世帯なデザイン事務所になった。基本はプロダクトデザインだから、工業デザインの仕事を中心にしている。今回のような大きな社会の変動期に入った時、次にどういう時代が来るのかということをきっちり見据えて企業をアドバイスする「全体力」というか「全体視力」必要がある。その時、やはり全体をいかに知っているかというデザインの力がまさしく必要になると痛感している。会社を辞めた後、愛知県はじめ公設試の方々に非常に親切にして頂き、各地域を指導する仕事を始めた。最初の仕事は、岐阜県陶磁器試験場からで「オイルが非常に上がって窯を焚く事ができない」「問屋さんは全く流通が動かない」そんな時にセラミックスが将来どうなるのかという指導事業が始まった。そこで例えばオールドセラミックスとファインセラミックスの両立が産地に必要だということで、現在でもファインの部分に進まれた人は元気にがんばっている。オールドの方は自らの伝統産業に入りすぎている。こんなところは気にかかる状況だ。

「不況時代の地域産業における戦略的デザイン活用と公設試の役割」というテーマを挙げさ

せて頂いた。今、正に社会が見難い、見通せない時にデザインという全体的なネットワークを持った専門職を如何に使うかというのはとても大事なポイントになるのではないかと考えている。私たちは、今までおそらく 10 万点に及ぶ仕事をやってきたと思うが、この中で幾つかの事例を紹介した後、総括させて頂きたい。

「企業戦略のテーマとしてデザインを取り入れ見事に成功した元気な企業」

## 1. 株式会社 稲本製作所

石川県の工業試験場の方から業務用クリーニング機械をアメリカの図面を貰って造っている会社がある。10 人足らずの人数だけでも少し相談に乗ってほしいと言うことでお邪魔しました。業務用のクリーニングマシンでテキサスのですねワセックス社というところの図面を貰ってそれをまさしく板金作業で組み立てていた。この機械を見ると、まずアメリカ人のモジュールのまま高さ 3 メーター近くあるだけ、日本のクリーニング屋さんのドアを壊して入れて中で組み立てるといようなことが必要になる。それよりももっと大事なことはこの洗濯物を入れる投入口の地上高からすごく高くてパートのお母さんが働いている現場では踏み台に乗って洗濯物を投げ込まないと入らない。ボディーは鉄製で、腐食性の高い洗剤を使うため、ぼろぼろに錆びる。一番問題はやっぱり働く作業環境があまりにもすざましい。熱い熱が出て、洗濯・脱水・乾燥といった三つのモーターがフル回転しているため、騒音もひどい。これをなんとかデザインの手で回避したいということで新しい機種を立ち上げた。ボディーは腐食しないように FRP を使った。このため色もですね好みの工場色に合わせた色が塗れる。そして操作系は、地元の小さなベンチャーのグループを呼び込んでマイコン操作進行状況の分かるインタフェースとした。一番大きなことは、この三つのやかましいモーターをワンモーターにする。インバーターで切替えて一つのモーターで幾つかの仕事をさせるというのは常識レベルで使っていた訳だが、少し業界が変わると三つのモーターを使うのが当たり前になってしまう。発表会したとたん、どんどん売れて 100 倍の売り上げになった。そして去年の暮れ、国道 8 号線の横に新しい新工場ができた。もちろんこの工場のデザインも中の機械のレイアウトも私どもが関わらせて頂いた。

## 2. 小松産機組合

これも、石川県の工業試験場の例だが組合が受注ばかりで夢がないので何かやりたいということで仕事を受けた。板金主体の技術だったのでスリッパケースを開発することとした。光触媒の中に塗布した病院用滅菌スリッパケースが開発できた。滅菌以外にも臭気を押さえる機能も確認できた。次に何かをやりたいということで、風力発電機に取り組んだ。これは突風への対応が重要で、現在三号機までできていて来年の発売を控えている。こういう下請け組合が自分たちの製品を考える事が出来る良い事例である。

## 3. 有松・鳴海絞

ジャパンブランドの採択を受けて、和装以外に洋装の分野に進出できないか取り組んだ。これも光触媒を具持させた。何度洗濯をしても光触媒が取れない繊維が開発できた。これで作った浴衣で歩くと空気が綺麗になる。ドイツのフランクフルトのショーに展示するというので、着物ではなく、照明器具に挑んだ。光触媒の付いたランプシェードを開発した。海外で非常に評判になり、何社かが集まり光触媒の加工をする会社を設立し、ランプシェードもここで製作することとなった。さらに、インテリア全体を志向し、絞りのベッドカバー、壁紙、カーペット、ライティング、パーテーションほかへ展開している。

## 4. 九谷焼

獅子だとかの置物を作製していたが、何か違う取り組みをしたいということがあった。丁度私が、燕三条地域の開発のお手伝いをしていたこともあり、金属(真鍮)を NC で挽いた部品とセラミックに絵付けをしたカップを付けるという商品を作ったらどうかと提案した。これの一番重要な技術は異素材の接着である。運良く化学メーカーの協力も得られ、接着剤の管理・利用や治具等を含め、産地で運用が図られている。金属とセラミックのコラボレーションとしての成功例である。鉛の基準は非常に厳しい。無鉛彩の開発はすばらしいが、有鉛のものと比べると色的に劣り、職人が使いたがらない。そこで、無鉛が合う商品を開発したらどうかと考え、江戸の吹きガラスと九谷焼とを組み合わせたワイングラスを開発した。これもガラスとセラミックスの接着の技術開発が必要となった。

## 5. 珠洲焼

能登の端にある産地で、これも石川県の試験場からの依頼で関わることになった。能登の地震対策の予算も付いたこともあり、どんぶり(能登どんぶり)の開発をした。能登出身ということもあり、道場六三郎が監修を務めた。開発したところ、観光資源として非常に好評で、観光客が訪れると、どのどんぶりを食べて帰るか話題になっている。能登は輪島塗しか資源がなかったが、これに白いご飯に合う真っ黒いどんぶりが評判で生産が追いつかない状況である。約 100 箇所で能登丼が食べられる。

## 6. 株式会社エー・アンド・デイ

従来の水銀を使った血圧計は、環境問題を背景にお医者さんが拒否反応を示すのではないかと。無水銀の血圧計を開発した。奇をてらわず、従来血圧計のイメージを残しながらデジタル表示の製品を開発した。予想道理、情報はすぐさま広がりこの地域でいうと日赤や名大病院など次々と導入が図られている。

## 7. ビーエムジーエー株式会社 ナビテックジャパン

安い洋食器を生産していても生きていけない。付加価値の高い製品を開発したい。新しい仕事に取り組むときは、トップの気持ちを引き出すことが肝心である。結果、当該社長はゴルフをこよなく愛す人物であることが分かり、ゴルフのクラブを開発することを提案した。ただ、普通のクラブでは面白くないため、クラブヘッドのバランスを変えることにより、クラブにも機能を持たせた。新潟大学でも実証し、当該大学の TLO を利用し、国際特許も得た。工場の半分はクラブの生産に変わった。

## 8. デイ・エス大進工業株式会社

熊本県のアドバイザーをしている関係で、お付き合いしている。建築部材を作っていたベンディング技術しかない企業であったがその技術を使い UD スロープを製作することになった。選挙の時など生産が間に合わない程の受注がある(投票所のバリアフリー)。園芸用の椅子の脚に使われるねじりという技術を使った金属があるが、建材として使ったらどうかと提案したところ、瞬く間に広まり、ルイビトンの外壁やホテルでこのねじり棒が使われていて好評である。

## 9. 株式会社 フジワラ

歩行補助具の手押し車椅子であるが、組み立てるのに前回の車種は 15 分程掛かるという事で、時間が掛かり過ぎるという評価を受けていた。そこで、レバーを引くと 1 秒でワンタッチにセットされるものを開発した。

## 10. 株式会社 スガイ総業

パチンコの部品メーカーだが、社会貢献できる商品開発がしたいということで、インフレ率の

高い国(イラク、インドネシアなど)お札を数える装置を開発した。ブラジル等貨幣価値の低い国に絶大な支持を得た。次にユーロの種類が多いコインを一気に数える装置の開発を試みる。大手の製品は既にあったが、電源は、単三電池でポータブルな製品として差別化されている。空港のお土産屋などに導入されている。これらにより得た利益を、次の新商品開発に投資したいとの事で、ゴルフ用 EV カートの開発に手がけた。今のゴルフカートは 1ton 近くあり、芝が痛んでしまう。150kg 切って、バルーンタイヤ履いたら芝の上を走れるだろうとゴルフ場から話があり、140kg の総重量であるゴルフカートが開発できた。アメリカの会社とロイヤリティー契約を結び、ハワイの工場生産される。

#### 11. その他 元気な中小企業と団体

北海道は炭坑が多く、その支柱を作るために非常に強度の強い松(カラ松など)を利用したが、現在、余っている。そこで、この松の有効化を図るため、DIY の茶室を開発した。3日~1週間で組み立てられる。

北見の例に移る。どうやら二畳の茶室が欲しいというニーズはあるという事が分かった。しかしながら、マンションでこれらを収納できるかという問題に対して、部屋の片隅に畳んでおいて、応急の床の間の様なスペースとして扱い、これを広げると茶室になるというアイデアを具現化しつつある。来年後半に販売が期待される。これは、札幌と北見の試験場の力を借りている。

#### 12. 北陸新幹線 石川県伝統技法活用提案

北陸の伝統産業の勉強会で青年部会が新しいことにチャレンジしたいと工業試験場より話があった。それならば、北陸新幹線をターゲットとした提案をしたらどうかということで、石川県は輪島塗、牛首紬、友禅などを新幹線の窓のバイザー、シートのヘッドレストカバー、テーブルの全面に輪島塗を使ってその上にポリカのカバーを掛ける。また、シートに友禅のデザインを生かすなど。北陸新幹線はビジネス車両ではないので、添乗員のコスチュームも含め大胆な提案をしたら如何だろうか。外装の金箔張りも提案し、強度的な実現性も試験場が入り検討する。また、その他通過県の伝統技術もふんだんに使った車両及びサービスを提案している。伝統産業も守るだけではなく攻める事も重要である。企画、戦略、計画もまさに本来のデザインのあり方である。

#### 13. .Mg.アタッシュケース

金型の技術が高いので、マグネシウムの新しいアタッシュケースに挑戦した。「世界最軽量」を目指し開発したアタッシュケースの量産モデルで「マグネシウム」である証に、素材の持つ表情を生かす表面処理とした。内装も軽量化を前提とした為、贅沢な素材を使用せずシンプルに徹する造りを目指した。ゼロハリバートンと真っ向から戦うをコンセプトとしている。

#### 14. 村田機械株式会社

産地の工場のシステムは何かということで、巨大なピラミッド工場を造って、モノを動かさず、現地でソーラーエネルギーによる加工をしたらどうか。原綿プラントから輸出先(アメリカ、ヨーロッパ、中国)へ行く間に船で必要な加工を施して着くなり製品を降ろす紡績船。

#### 15. アドバンスアプローチ

当事務所で手がけたロボットであるが、ロボットも走り回るロボット以外にも、殆ど前後くらいにしか動かない会話を中心のロボットで子供やシルバーをユーザーとしたものもある。

#### 企業の格が変わる

最後になったが、このようにこれからの 2010 年を境に様々な価値観が変わる。今不景気で確かに大きく揺れ動いているが、これが少し落ち着いたときには(私は 2010 年と見ている)、このモノ

造りの概念だとか企業の概念・開発の概念が少し変わっていくのではないかと思っている。企業の大きさと量とか利、売上が非常に高いだとか沢山造っているとかいうことよりも、もう少しカルチャーの認識の高い産業が光ってくるだろうとか、あるいはそのハード重視の考え方から心中心・ソフト中心に替わるだろうとか、それから軽薄短小とか、こういう機能中心から知的であるとか創造であるとか、まさしく遊であるとか美しいとか、情感訴求型に企業は大きく替わらなければならない。これは、何かというと社会の価値観が大きく変わっていくからである。もちろん自動車とか飛行機もあるいは生活環境も変わるが、一番大きなのは価値観が変わる事に企業はマッチしていかなければ生きられない。ここを伝えたくてお話しした。今も北海道と一緒にマネジメントスクールのお手伝いとか、人材育成も含めてあちらこちらの地域の次のデザイナーを育てるというお手伝いもしている。公設試の役割は本当に大切だと思うが、そういうことが本当に県政だとかあるいは国の施策にきちんと反映していくという仕組みを作らないといけない。

### 3. 講師を囲んでの懇親会

参加者から、個々の課題について、両講師より助言を受ける。

### 4. 見学会

国際デザインセンターミュージアムの見学

### 5. 解 散

以上